

令和4年度 第1回 校長「語らいサロン」
 テーマ「主体性」について ～教育目標「自立 自ら学び、考え、行動する人」～

はじめに 「しあわせはいつも じぶんのところが きめる」 相田みつを



「主体性」とは？

1) 「主体性」と「自主性」のちがい

主体性 何をすべきかも含め自分で考え、意思決定して実行すること

自主性 ある対象に対して、やるべきことを判断し、積極的に行動すること

2) AI と主体性

考える必要がなく、誰にでもできる定型業務 → 機械（AI）が人間よりも上手に、素早く、正確にやってくれる。

これからの人間に求められているのは、「主体性」

3) 「主体性」「主体的である」こと being *proactive*

active(act, action) + re- (反対の、対立する、再び、繰り返す、新たに)

= reactive (react, reaction) (反応型の、受け身的な、反応しやすい)

cf 「作用－反作用」"action, reaction"

active + pro- (前の、先の、前に、前へ) = proactive (先取りする、先を読んで行動する)

「主体性」の定義

「主体性とは、自発的に率先して行動することだけを意味するのではない。人間として、自分の人生の責任を引き受けることも意味する。私たちの行動は、周りの状況ではなく、自分自身の決定と選択

の結果である。私たち人間は、感情を抑えて自らの価値観を優先させることができる。人間は誰しも、自発的に、かつ責任をもって行動しているのである。

責任は英語でレスポンシビリティ (responsibility) という。レスポンス (response=反応) とアビリティ (ability=能力) という二つの言葉でできていることがわかるだろう。主体性のある人は、このレスポンシビリティを認識している。自分の行動に責任を持ち、状況や条件付けのせいにしない。自分の行動は、状況から生まれる一時的な感情の結果ではなく、価値観に基づいた自分自身の選択の結果であることを知っている。

人間は本来、主体的な存在である。だから、人生が条件付けや状況に支配され散るとしたら、それは意識的にせよ無意識にせよ、支配されることを選択したからに他ならない。

そのような選択をすると、人は**反応的** (reactive) になる。反応的な人は、周りの物理的な環境に影響を受ける。天気が良ければ、気分も良くなる。ところが天気が悪いと気持ちがふさぎ、行動も鈍くなる。**主体的** (proactive) な人は自分の中に天気を持っている。雨が降ろうが陽が照ろうが関係ない。自分の価値観に基づいて行動している。質の高い仕事をするという価値観を持っていれば、天気がどうであろうと仕事に集中できるのだ。

反応的な人は、社会的な環境にも左右される。彼らは「社会的な天気」も気になってしまうのだ。人にちやほやされると気分がいい。そうでないと、殻をつくって身構える。反応的な人の精神状態は他者の出方次第でころころ換わるのである。自分をコントロールする力を他者に与えてしまっているのだ。

衝動を抑え、価値観に従って行動する能力こそが主体的な人の本質である。反応的な人は、その時々感情や状況、状況付け、自分を取り巻く環境に影響を受ける。主体的な人は、深く考えて選択し、自分の内面にある価値観で自分をコントロールできるのである。」

『完訳 7つの習慣 人格主義の回復』(スティーブン・R・コヴィー著)「第1の習慣 主体的である」より

「主体的である」方法

1) 反応する前に一時停止する

外からの刺激に対して、何も考えずその時に気分ですべて反応してしまうのは、自分の行動を外からの刺激にコントロールされている状態。主体的に行動するには、外からの刺激に対して、一呼吸おくなど、十分に間を置いて、効果的な反応を選択すること。自分の行動を自分が決める (選択すること)。

2) 主体的な言葉を使う

反応的な言葉	主体的な言葉
できません	できます
～しなければならない	～することにします
私のせいではない	申し訳ありません
他に選択の余地はない	すべての選択肢を考えてみよう
どうにもならない	何かできることがあるはず

「ネガティブ」

「ポジティブ」

とも言える

『7つの習慣』「第1の習慣 主体的である」より